

大阪錦繪新聞

第三号

あはれ小角の芝居の大舞臺、檜の火あびて、牡丹の花の火の松の玉の振り毛のてげさにはちまのとくつりし火のちとありひいてる大一座見物客へ表木戸迄飛び裂る程大入、群集の同ト裏木戸の消防方多入敷、駆け付たる川付の古来捕ある人氣の、もの事、わんとなりて用意とあせと、亦舞臺へ火の玉も、心と氣性の膽玉とさかど火とも消して、残らば獅子の所作事も、目出さく四月十九日、とて、囃子のち、だーん、ガッ、評判しくも、藝に親王と多見藏と鑿聲満るも中に、或る願負より見舞じて、金五円贈じが、竹本君太夫、即席お（火水とも忍まぬ獅子の勢ひ三回無双あぐい膳玉）と祝し、おはしう獅子嬉しと、刃幸円と其後、君太夫（遣世）とあん

浪花画工
笹木芳瀧



八尾 芳吉

